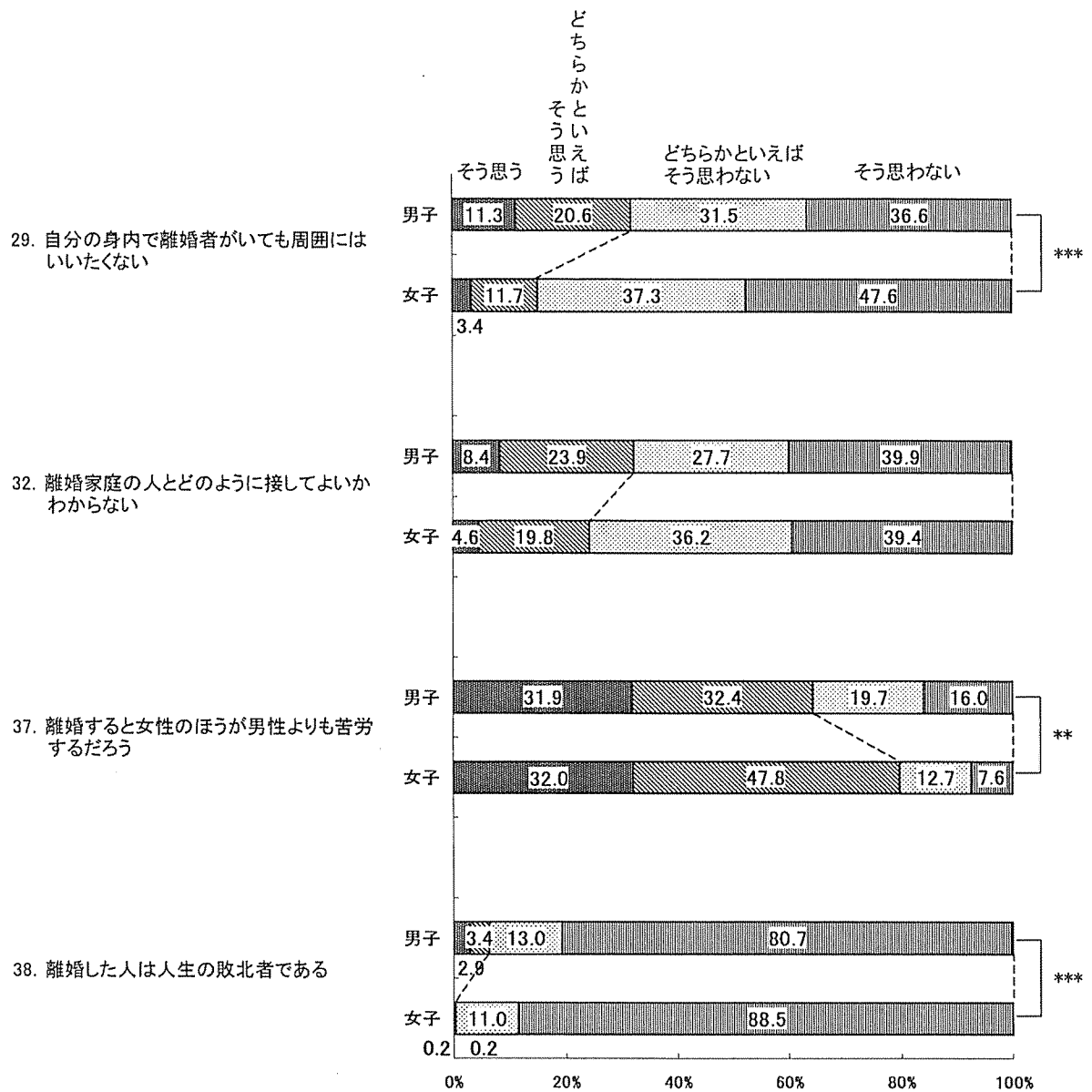


図表 2.2d 男女別みた離婚に対する考え(Q2)(続き)



図表 2.2 に見られるように、男子は女子に比べると、離婚に対する抵抗感、嫌悪感が強く、離婚は避けたいし、離婚が周囲に知られると世間体が悪いと考えている。一方、女子は男子に比べると、離婚に対して寛容で、状況によっては仕方がないと認識しているが、離婚すると女性の方が男性よりも苦勞すると強く感じている。

(2) 離婚する原因に対する考え(Q2)

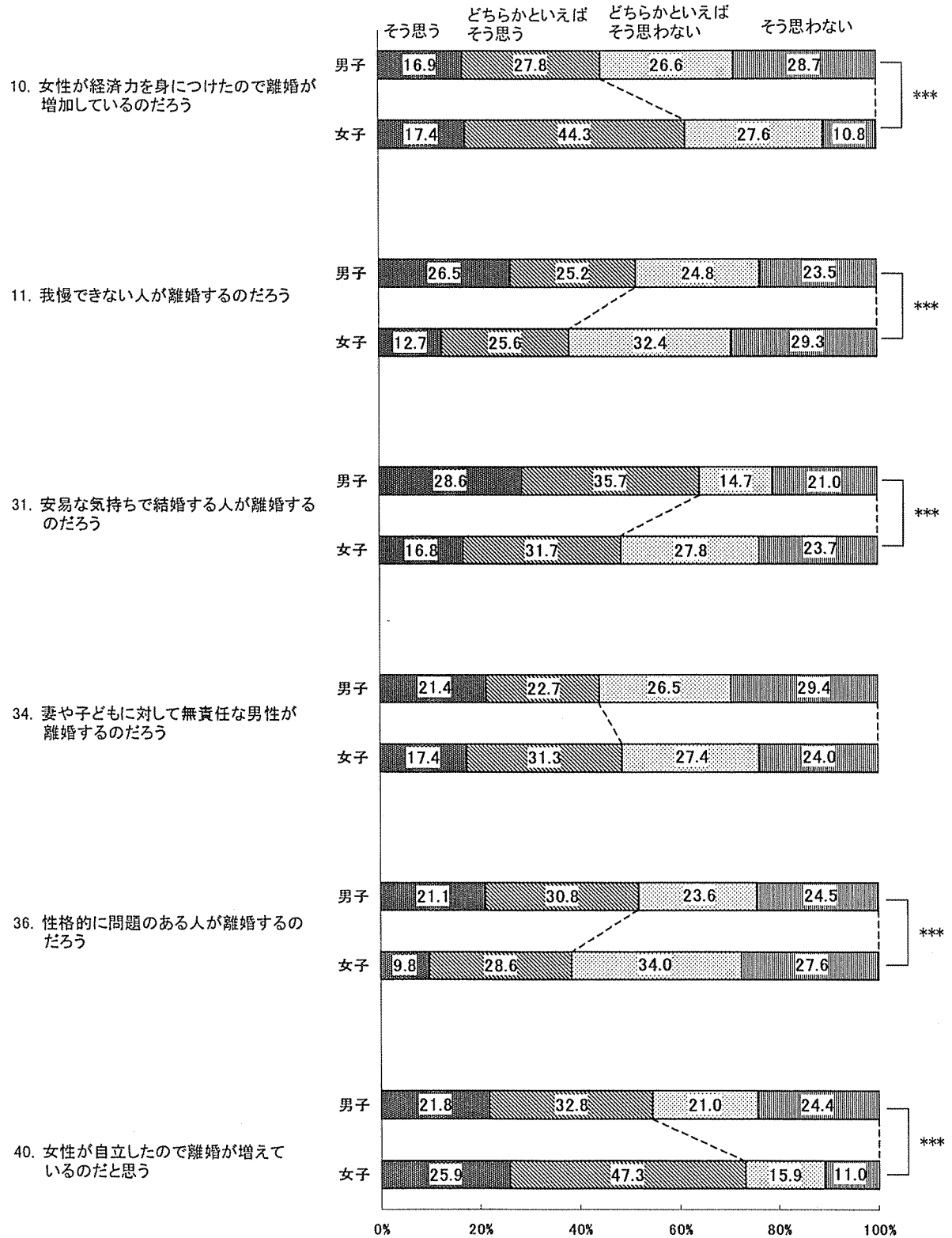
① 離婚する原因に対する考えの全体的傾向

8割強の学生が、「離婚する人は、子どもへの愛情が少ない人である」という意見には反対していたが、その他の意見「安易な気持ちで結婚する人が、離婚する」、「性格的に問題がある人が、離婚する」などについては、賛成と反対が概ね半々となった。このように大学生は、離婚の原因については明確な考えを持っていなかった。

② 離婚する原因に対する考えにおける性差

男女別に見た離婚の原因に対する考えの回答結果を図表 2.3 に示す。

図表 2.3 男女別に見た離婚の原因に対する考え(Q2)



図表 2.3 にみられるように、男子は女子に比べると、離婚する人は、「子どもへの愛情が少ない人」「我慢できない人」、「性格的に問題がある人」と強く感じていた。つまり、男子は女子よりも、離婚する人には、親として自覚の欠如と本人の性格的な問題があり、それが原因で離婚すると認識していた。

(3) 離婚家庭の子どもに対する考え(Q2)

① 離婚家庭の子どもに対する考えの全体的傾向

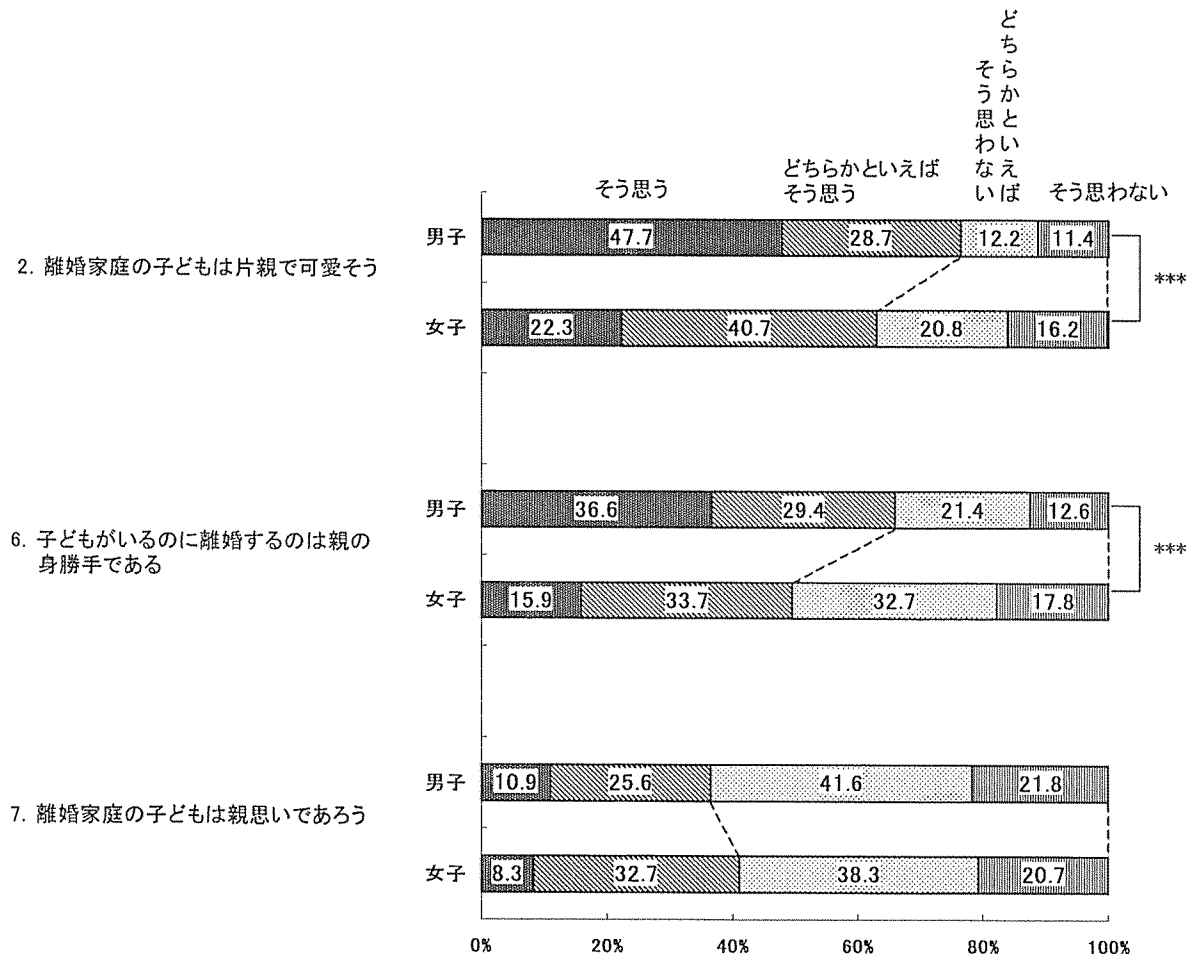
7割の学生が「離婚家庭の子どもは、片親でかわいそう」と、9割以上の学生が「離婚すると、子どもにストレスがかかる」と感じ、8割前後の学生が、「離婚家庭の子どもは、学校で問題を起こしやすい」、「離婚家庭は、不良のたまり場になりやすい」という意見には反対していた。

以上のように、大学生は親が離婚しているということだけで子どもに問題行動が生じるとは考えていないが、離婚家庭の子どもは心理的負担が多く、気の毒であると感じていた。

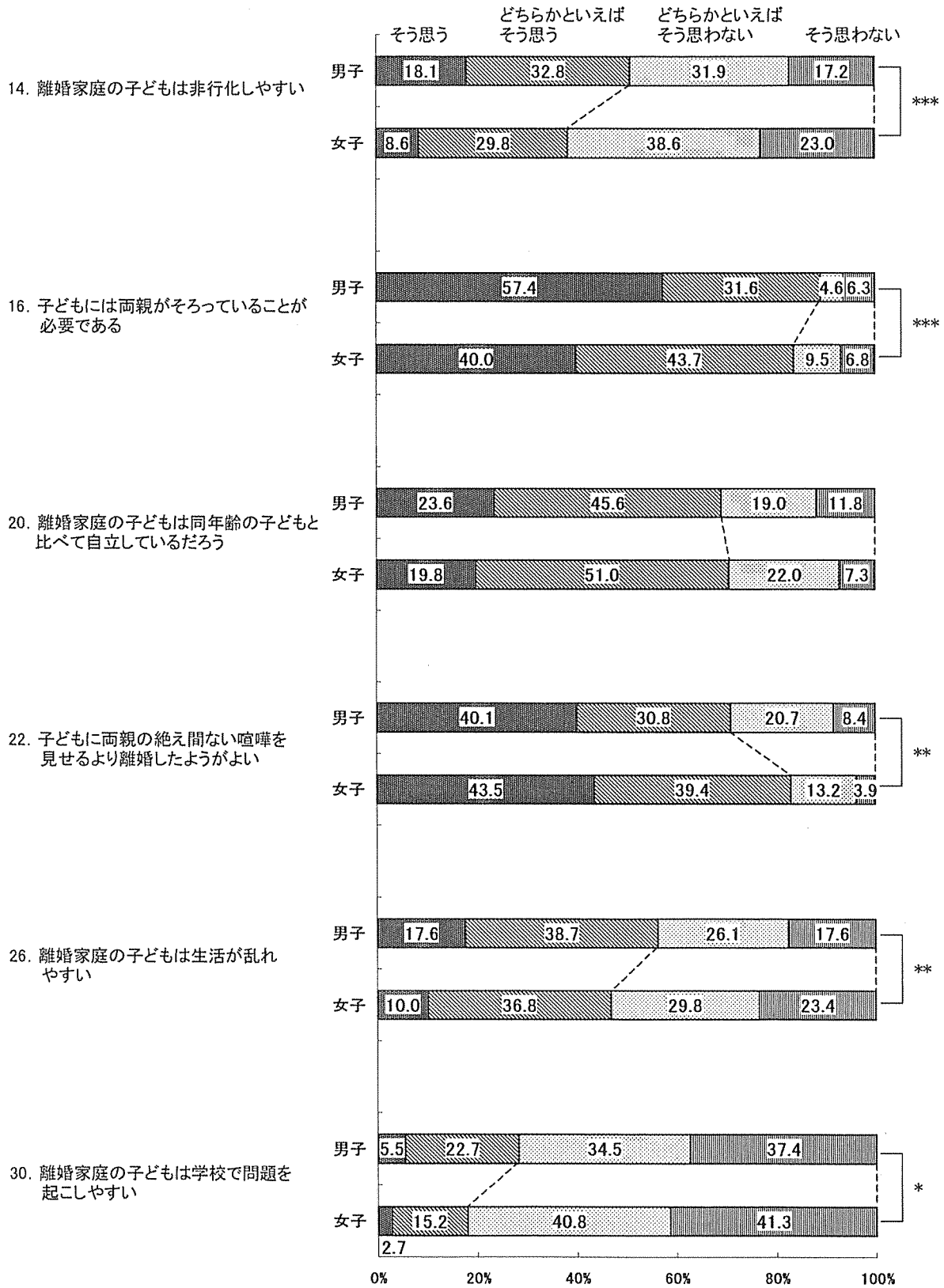
② 離婚家庭の子どもに対する考えにおける性差

男女別に見た離婚家庭の子どもに対する回答結果を図表 2.4 に示す。

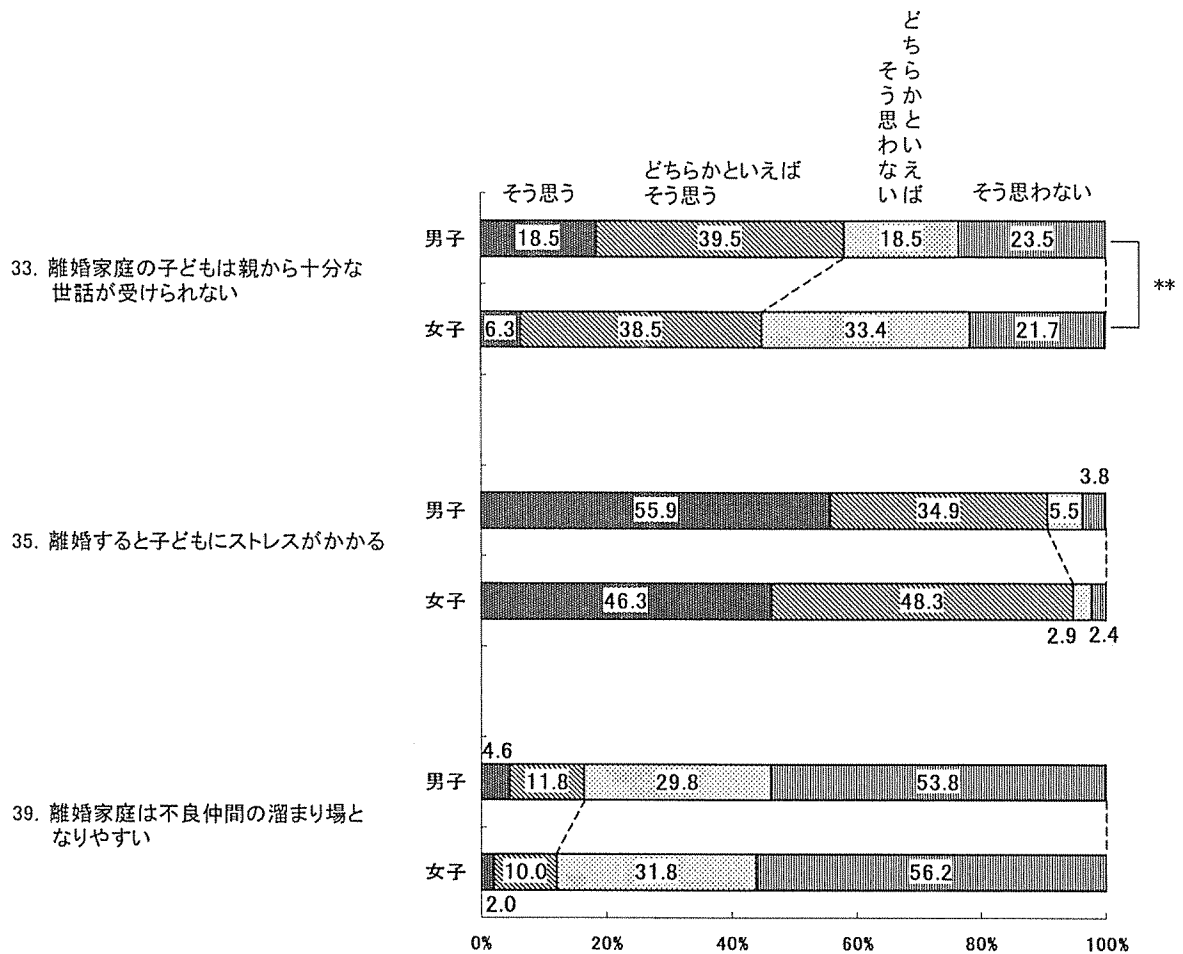
図表 2.4a 男女別に見た離婚家庭の子どもに対する考え(Q2)



図表 2.4b 男女別に見た離婚家庭の子どもに対する考え(Q2) (続き)



図表 2.4c 男女別に見た離婚家庭の子どもに対する考え(Q2)(続き)



図表 2.4 にみられるように、男子は女子に比べると、「子どもには、両親がそろっていることが必要」、「離婚家庭の子どもは、片親で可愛そう」、「離婚家庭の子どもは、親から十分な世話が受けられない」と強く感じており、離婚家庭の子どもは、「非行化しやすい」、「生活が乱れる」、「学校で問題を起こす」と認識していた。つまり、男子の方が女子よりも、離婚家庭の子どもは親から十分な配慮と世話が受けられずに気の毒であり、反社会的な問題を起こしやすいと捉えていた。

2. 離婚に対する意識の構造

(1) 因子分析による離婚に対する意識の構造の検討

離婚に対する意識の構造を明らかにするために、離婚に対する考え・離婚する原因・離婚家庭の子どもに対する考えのすべてを合わせた全項目に対して因子分析（主成分解、バリマックス回転）を行った。それぞれの質問項目に対する回答は、「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえばそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点と得点化された。

固有値 1 以上の因子について、バリマックス回転を行った結果、5 因子が抽出された。各因子の寄与率（回転後）は、第 1 因子から順に、11.3%、9.9%、7.1%、5.6%、5.1%であり、累積寄与率は、38.9%であった。因子分析の結果を図表 2.5 に示す。